

5. 4で「ある」と回答された方（現在、支援機器やソフトを使用している方）にお聞きします。支援機器の利用に関して、どのようなところで相談されていますか？

6. 4で「ない」と回答されたにかたお聞きします。
なぜ、支援機器を使っていませんか？その理由をお聞かせください

7. 過去に使用していた支援機器やソフトはありますか(VOCAを含む)あれば教えてください。また、それを活用することができていたと思いますか？該当するところに○をつけてください。

ない

ある

機器の名称：

利用期間： 年 月～ 年 月

使用場面：

活用できていなかった どちらとも言えない 活用できていた



その理由

()

機器の名称：

利用期間： 年 月～ 年 月

使用場面：

活用できていなかった どちらとも言えない 活用できていた



その理由 ()

機器の名称：

利用期間： 年 月～ 年 月

使用場面：

活用できていなかった どちらとも言えない 活用できていた



その理由 ()

8. 7で「ある」と回答された方（過去に、支援機器を使用していた方）にお聞きします。
現在その支援機器を使用していないのは、なぜですか

9. 今までに購入した支援機器やソフトについて、その値段に満足していますか？

機器の名称：

満足していない どちらとも言えない 満足している

その理由 ()

機器の名称：

満足していない どちらとも言えない 満足している

その理由 ()

機器の名称：

満足していない どちらとも言えない 満足している

その理由 ()

10. 支援機器の相談体制に満足していますか？その理由もお聞かせください

満足していない どちらとも言えない 満足している

その理由

11. どのような環境が整うことが満足につながるとお考えですか？ご自由にお書きください

12. その他（ご意見をご自由にお書きください）

13. 差し支えなければ、あなたのお名前と連絡先をお知らせいただけないでしょうか？詳細についてお聞きしたいときに連絡させていただきたいと思います。なお個人情報には責任を持って坂井研究室が管理いたします。

お名前 ()
ご連絡先 ()
メールアドレス

ご協力ありがとうございました

Appendix 2 支援機器使用に関する評価

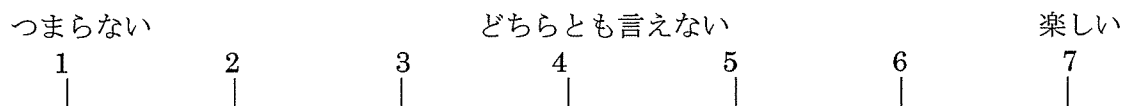
これは、支援機器が実現する機能と生活との関連についてお尋ねするものです。以下の質問にお答えください。

子どもさんについてお聞きします

年齢（ ） 障がいについて（ ）手帳（ ）
性別（ 男 女 ）

〔1〕VOCAの利用について

1-6 楽しさについてお伺いします。その機器があるとその活動が楽しいですか。1がつまらない、7が楽しいという1から7の7段階でお答えください。

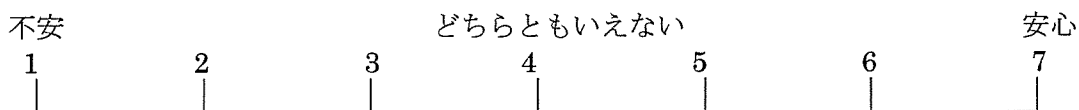


〔2〕VOCAの及ぼす心理的影響について

2-1 安心感

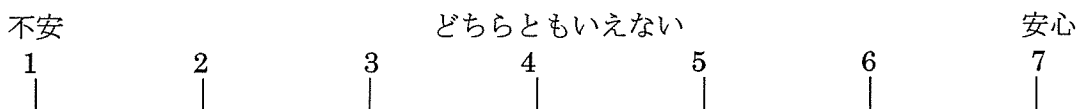
2-1-1

現在の生活で、その機器が補償する活動（質問1で答えた活動）に対して感じる安心感は何のくらいですか。不安が強いというのを1とします。とても安心だというのが7です。どちらでもないニュートラルな状態は4です。1から7の数値で表すとどれくらいの値ですか。



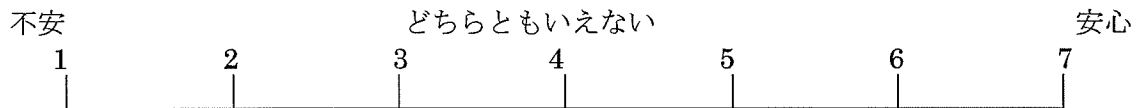
2-1-2

今度は、今お使いのその機器がなくなったとしたら・・・そう仮定してお答えください。その活動に対する安心感についてはどう感じますか。1がすごく不安、7がとても安心という1から7の数値で表すとすればどれくらいの値ですか。



2-1-3

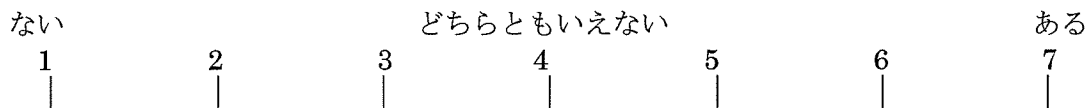
昔を思い出してください、その機器を使っていなかった頃です。その活動に対する安心感についてはどう感じていましたか。1から7の数値で表すとすればどれくらいの値ですか。



2-2 意欲

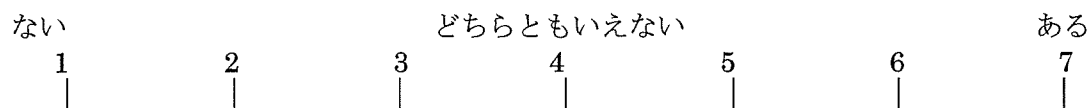
2-2-1

その機器が補償する活動に対し、現在どのくらい意欲がありますか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



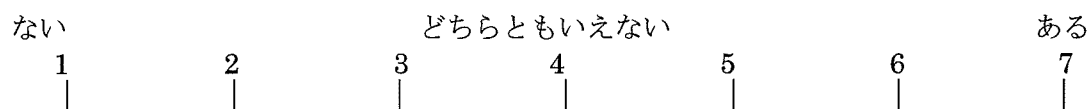
2-2-2

あなたがお使いの機器が今なくなったとしたら・・・そう仮定してお答えください。その時、その機器が補償する活動に対し、どのくらい意欲があると思いますか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



2-2-3

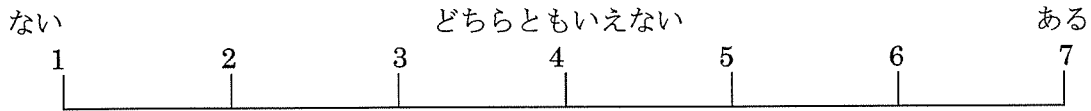
今度は、その機器を使い始める前を思い出してお答えください。その時、その機器が補償する活動に対し、どのくらい意欲があると思いますか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



2-3 ストレス

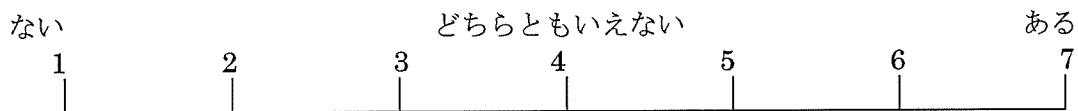
2-3-1

現在、その機器のある生活でストレスがどのくらいありますか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



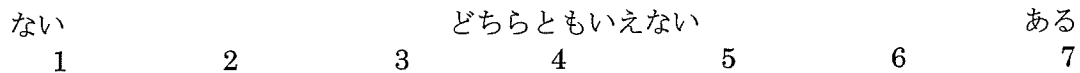
2-3-2

では次に、お使いの機器がなくなったと仮定してお答えください。その時、その機器がなくなった事で生じるストレスはどれくらいあると思いますか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



2-3-3

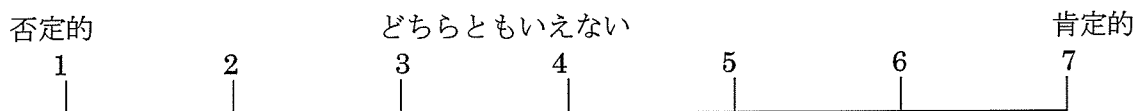
今度は、その機器を使い始める前を思い出してお答えください。その機器を使い始める前の生活で、ストレスがどのくらいありましたか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



2-4 周囲の評価

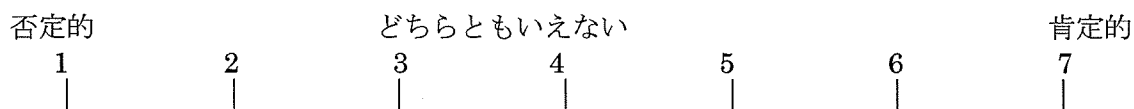
2-4-1

現在、その機器を使っているあなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか？あなたがどう思っているかお答えください。1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



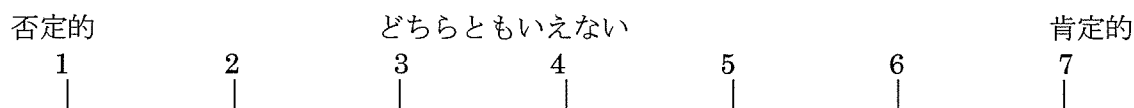
2-4-2

その機器がなくなったときの、あなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか。あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



2-4-3

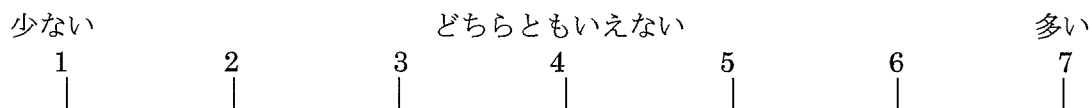
その機器を使い始める前の、あなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか、あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



2-5 コミュニケーションの機会

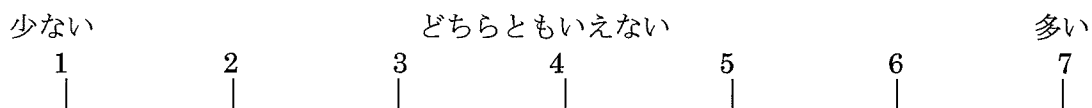
2-5-1

現在、その機器を使っているあなたがもつコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか、あなたがどう思うかお答えください。少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



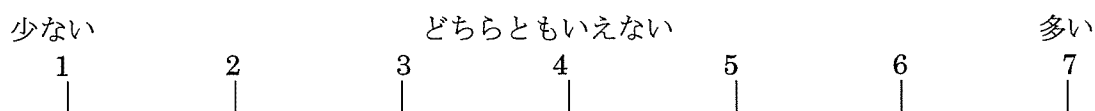
2-5-2

その機器がなくなった時、あなたが持つコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



2-5-3

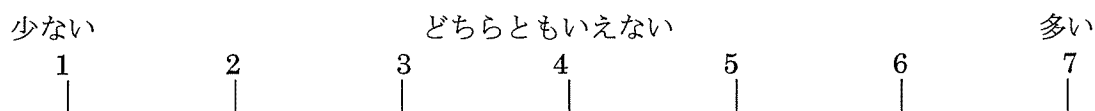
その機器を使い始める前のあなたの持つコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



2-6 コミュニケーションの相手

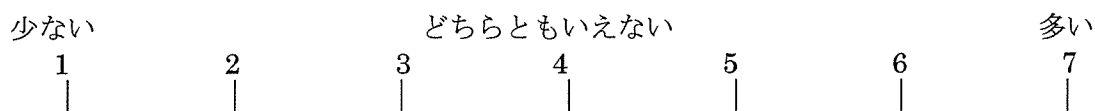
2-6-1

現在、あなたのコミュニケーション相手の数についてお伺いします。その数は多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



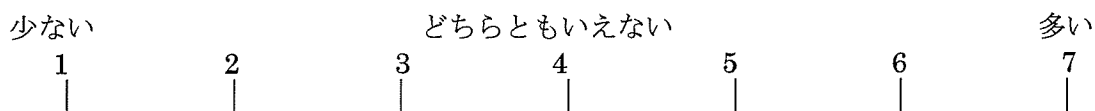
2-6-2

その機器がなくなったときのあなたの持つコミュニケーション相手の数についてお伺いします。その数は多いですか、少ないですか。あなたがどう思うかお答えください。1が少ない、7が多いという1から7の7段階でお答えください。



2-6-3

その機器を使い始める前を思い出してください。コミュニケーション相手の数について、多いと思いますか、少ないと思いますか。少ないと思うを1、多いと思うを7とする7段階でお答えください。



Appendix 3 タイムエイド利用に関する質問

これは、タイムエイドが実現する機能と生活との関連についてお尋ねするものです。以下の質問にお答えください。

子どもさんについてお聞きします

年齢（ ） 障がいについて（ ）手帳（ ）
性別（ 男 女 ）

〔質問1〕 TEACCH プログラムの構造化のアイデアを取り入れていますか。

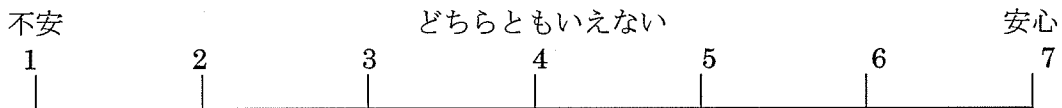
1 取り入れている 2 取り入っていない 3 わからない

〔質問2〕 質問1で 1 取り入れていると回答した方にお聞きします。

2-1 安心感

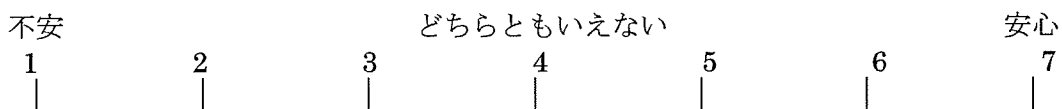
2-1-1

現在の生活で、あなたが TEACCH プログラムの構造化について感じる安心感はどのくらいですか。不安が強いというのを1とします。とても安心だというのが7です。どちらでもないニュートラルな状態は4です。1から7の数値で表すとどれくらいの値ですか。



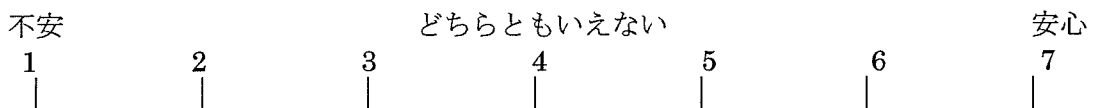
2-1-2

今度は、もし、構造化が取り入れられていないとしたら・・・そう仮定してお答えください。活動に対する安心感についてはどう感じますか。1がすごく不安、7がとても安心という1から7の数値で表すとすればどれくらいの値ですか。



2-1-3

昔を思い出してください、構造化について取り組んでいなかったころです。その活動に対する安心感についてはどう感じていましたか。1から7の数値で表すとすればどれくらいの値ですか。



4-2-2

タイムエイドが今なくなったとしたら・・・そう仮定してお答えください。その時、4-2-1の活動に対し、どのくらい意欲があると思いますか。1がない，7があるという1から7の7段階でお答えください。

ない	どちらともいえない					ある
1	2	3	4	5	6	7

4-2-3

今度は、タイムエイドを使い始める前を思い出してお答えください。その時、4-2-1の活動に対し、どのくらい意欲があったと思いますか。1がない，7があるという1から7の段階でお答えください。

ない	どちらともいえない					ある
1	2	3	4	5	6	7

4-3 ストレス

4-3-1

現在、タイムエイドを使った生活でストレスがどのくらいありますか。1がない，7があるという1から7の7段階でお答えください。

ない	どちらともいえない					ある
1	2	3	4	5	6	7

4-3-2

では次に、子どもさんがお使いのタイムエイドがなくなったと仮定してお答えください。その時、タイムエイドがなくなったことで生じるストレスはどれくらいあると思いますか。1がない，7があるという1から7の7段階でお答えください。

ない	どちらともいえない					ある
1	2	3	4	5	6	7

4-3-3

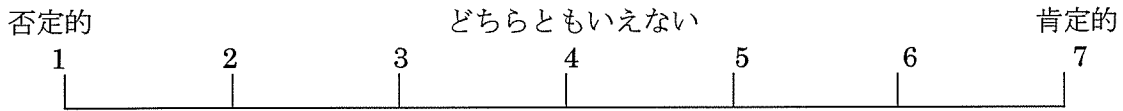
今度は、タイムエイドを使い始める前を思い出してお答えください。タイムエイドを使い始める前の生活で、ストレスがどのくらいありましたか。1がない，7があるという1から7の7段階でお答えください。

ない	どちらともいえない					ある
1	2	3	4	5	6	7

4-4 周囲の評価

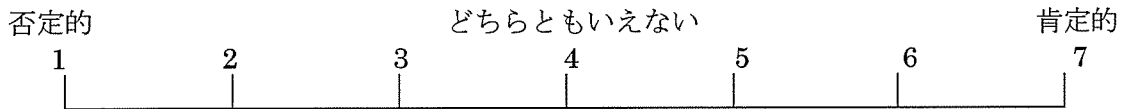
4-4-1

現在、タイムエイドを使っている子どもさんに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか。あなたが周囲の評価をどう感じるか、1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



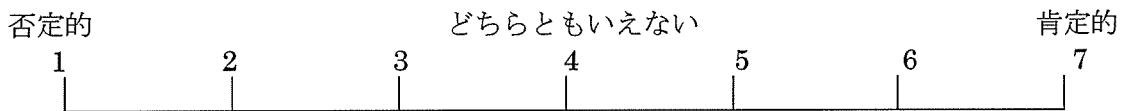
4-4-2

タイムエイドがなくなったときの、あなたの子どもさんに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか。あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



4-4-3

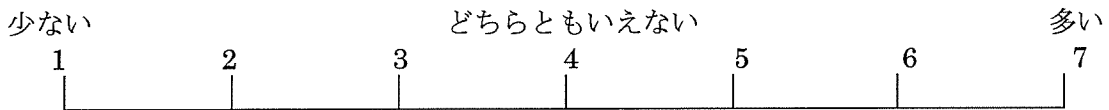
タイムエイドを使い始める前の、あなたの子どもさんに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか。あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



4-5 コミュニケーションの機会

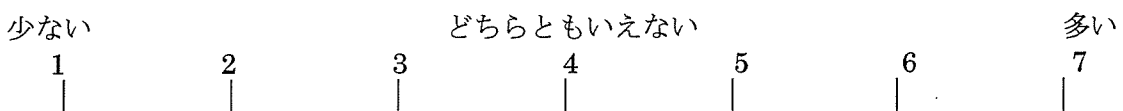
4-5-1

現在、タイムエイドを使っている子どもさんとのコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会は多いですか、少ないですか。あなたがどう感じているか、少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



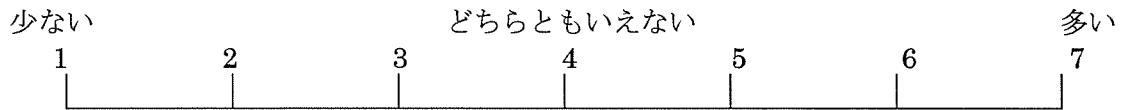
4-5-2

そのタイムエイドがなくなった時、子どもさんとのコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会は多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか、少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



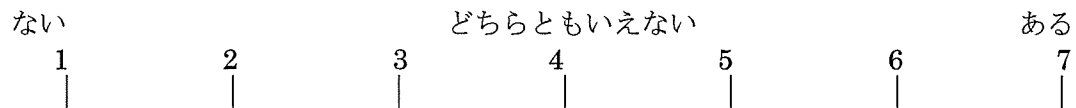
4-5-3

そのタイムエイドを使い始める前の子どもさんとのコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会は多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか、少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



2-3-3

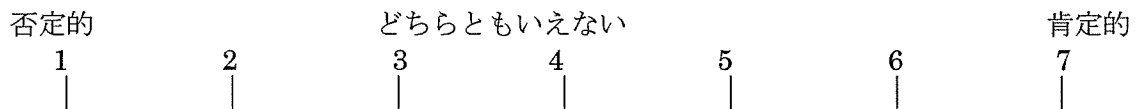
今度は、その機器を使い始める前を思い出してお答えください。その機器を使い始める前の生活で、ストレスがどのくらいありましたか。1がない、7があるという1から7の7段階でお答えください。



2-4 周囲の評価

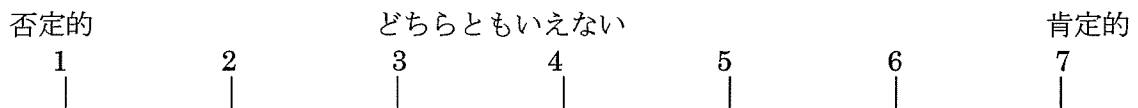
2-4-1

現在、その機器を使っているあなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか？あなたがどう思っているかお答えください。1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



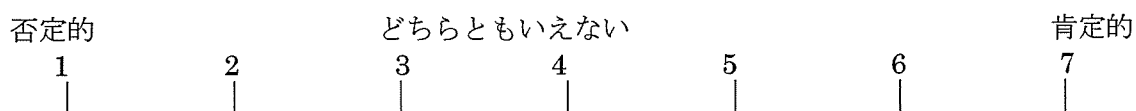
2-4-2

その機器がなくなったときの、あなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか。あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



2-4-3

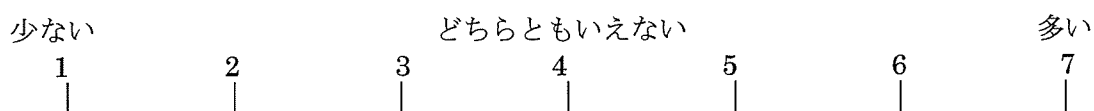
その機器を使い始める前の、あなたに対する周囲の評価についてお伺いします。その評価は否定的ですか、肯定的ですか、あなたがどう思うか1が否定的、7が肯定的という1から7の7段階でお答えください。



2-5 コミュニケーションの機会

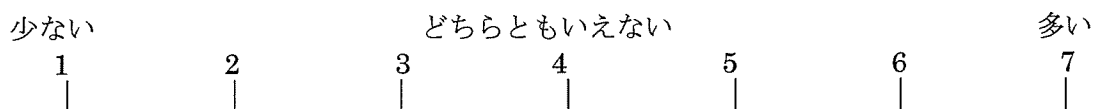
2-5-1

現在、その機器を使っているあなたがもつコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか、あなたがどう思うかお答えください。少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



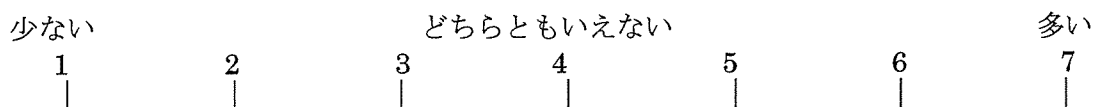
2-5-2

その機器がなくなった時、あなたが持つコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



2-5-3

その機器を使い始める前のあなたの持つコミュニケーションの機会についてお伺いします。その機会が多いですか、少ないですか。あなたがどう思うか少ないを1、多いを7とする7段階でお答えください。



米国の支援技術利用に関するエビデンス活用の現状

分担研究者 巖淵 守（広島大学大学院教育学研究科）

米国では支援技術エビデンスに関する学術専門誌も発行され、研究面では多くの報告がなされている。尺度開発から実際の効果測定、測定の自動化に関する方法など、その幅が広がっている。一方で、保険会社、行政によるエビデンスの測定と活用は十分ではない。エビデンス測定に要する時間やコストがその障壁となっており、この問題がクリアされれば、エビデンスの活用は活発になるであろう。

現在、支援機器利用効果測定に関する議論が活発に進められている北米リハビリテーション工学協会（RESNA: Rehabilitation Engineering & Assistive Technology Society of North America）、ならびに支援技術産業協会（ATIA: Assistive Technology Industry Association）の活動から、RESNA 2006 カンファレンスと専門誌「Assistive Technology Outcomes and Benefits Journal」を取り上げ、支援機器利用効果測定に関する最近の動向について考察する。

1 RESNA 2006 カンファレンス

RESNA カンファレンスでは、支援機器利用効果測定、ならびにそのデータ分析によって得られた科学的根拠をベースとした実践に関する発表が多数見られる。現在、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 Smith らが率いる ATOMS (Assistive Technology Outcomes Measurement System) と、西オンタリオ大学 Jutai らのチームや、デューク大学、モントリオール大学等のチームの連携によって構成される CATOR (Consortium for Assistive Technology Outcomes Research) が、北米における支援機器利用効果測定に関する2大研究プロジェクトとして注目されている。RESNA 2006 カンファレンスでは、これら2つのプロジェクトからの報告が、その研究規模や発表数の上で大きな役割を担っていた。

RESNA 2006 カンファレンスにおける研究発表から、支援機器利用効果測定に関して、「先行研究・データの系統的調査」、「定量的データ取得の広がり」の2つの特徴が見られた。

「先行研究・データの系統的調査」につ

いては、ATOMS プロジェクトが保健・リハビリテーションに関する全米規模のデータを集約することで、支援機器利用効果データベースを作成している。一方、CATOR プロジェクトは、1980年代以降の学術論文の系統的調査を実施している。

「定量的データ取得の広がり」については、利用効果が RESNA の SIG (Special Interest Group) の1テーマとしてすでに設定されているように、その重要性が協会内で認識され、具体的アプローチとして測定手法の開発や測定領域の拡大といった普及を目指す動きが見られる。測定へのテクノロジー利用の例では、COMPASS (www.kpronline.com) など、評価ツール製品がすでに存在し、測定手段への RFID, Wi-Fi, Bluetooth といった無線技術の応用も議論されている。ただし、現在のところ、測定によって得られたデータの解釈に関する議論の余地は大いにあり、今後の発展が望まれる。

以下、代表的な3つの発表を取り上げ、その特徴を紹介する。

(1) ATOMS Project Summary of Findings: Needs Assessment of AT Outcomes and Directions for the Future

ATOMS プロジェクトからは、「National Health Information Survey - Disability (NHIS-D)」、「Rehabilitation Services Administration (RSA) Case Service Report」、「Ohio School AT Outcomes」の3つの巨大データベースから個人が特定される情報を削除し、支援機器利用効果に関するデータのみを抽出できるよう設計されたインターネット上データベースを開発していることが報告された。ここで、前半2つのデータベースは、全米をそのデータ対象

範囲としている。3つ目のデータベースはオハイオ州のみが対象であるものの、1700名以上にわたる生徒について、支援機器導入前後のパフォーマンス情報が IEP 書類も併せて集められている。

また ATOMS プロジェクトでは、ウィスコンシン州にある車いすのリサイクル場と連携し、車いすがリサイクル用に提供される際に、元利用者や家族に使用中止理由を尋ねることで利用効果の算出を目指す研究も行っている。

(2) Clinical AT Outcome Research: Making it Happen, Making it Better

CATOR プロジェクトの一環として、1980年代から現在までの国際学会誌に掲載された査読付論文 82 件を系統的に調査した結果が報告された。調査対象となった論文の著者グループの国別内訳は、アメリカ (56%)、イギリス (14%)、カナダ (10%)、スウェーデン (8%) であり、出版年代別による内訳では、1980 年代 (18%)、1990 年代 (64%)、2000 年代 (18%) であった。対象となった論文の内、科学的根拠に基づいた処方に関する理論まで議論した論文は全体のわずか 15% しかなかったことが報告された。また、支援機器利用効果測定を臨床場面に応用する際に重要となる情報として、以下の事項が提案された。

- ・実施場所 (病院, 学校, AT センター等)
- ・関係者 (療法士, 教員, 家族など)
- ・サービスの種類 (評価, フィットティング, 訓練についての頻度, 数, 時間)
- ・支援機器の使用頻度・時間
- ・利用経験
- ・試用の有無
- ・入手方法 (保険, 学校, 個人購入)
- ・同時に発生する事柄 (手術, 薬物治療, 療法)
- ・収入, 就労, 教育, 住環境 (単身, 家族), 地域への参加
- ・支援機器に対する認知されたニーズ
- ・介助者の負担

(3) Advances in AT Outcome Research

CATOR プロジェクトでは、支援機器利用について利用者を (1) 使用を続ける人、(2) 他の機器の利用に移った人、(3) 機器を完全に放棄した人、の3つに分け、機

器利用に対する心理的効果、特に機器利用の継続性を議論している。後半の2つの利用タイプは、ともにはじめの機器については使用放棄ではあるものの、(2) は引き続き (別の) 支援機器を利用している。この継続性の差に注意しながら利用効果の議論をすべきことの重要性が指摘された。あわせて PIADS (Psychosocial Impact of Assistive Devices Scale) の得点により機器の継続利用が予測可能であることも示された。

2 Assistive Technology Outcomes and Benefits Journal

本専門誌は、支援技術産業協会 ATIA がイリノイ州立大学 SEAT (Special Education Assistive Technology) センターと協力し、2004 年以降年 1 回のペースで発行されている。以下の表に 2004 年発行の第 1 巻から 2006 年発行の第 3 巻までの掲載論文の全タイトルを示す。編集者が巻頭言で述べているように、研究者からの報告に限定せず、支援機器産業に携わる企業からの実践報告や、機器利用者や家族からの報告も含むことで、この雑誌が支援機器に関わる幅広い人々に対して有用な情報源となることが目指されている。そのためか、科学的根拠の汎用性に乏しい報告も一部含まれるものの、内容に関わらず全ての論文の中で、雑誌のタイトルでもある利用効果 (Outcomes) と恩恵 (Benefits) について議論されている。支援機器普及のカギとして科学的根拠をベースにした取り組みが今後必須であることを、支援技術産業界が意識していることがここに示されているのではないだろうか。

3 まとめ

米国において、支援技術利用効果に関する研究は広がりを見せつつある。しかし、保険会社が、機器の給付要件に利用効果のエビデンスを求めることはまだ行われていない。医師の診断書で、その障害に応じた機器の給付を受けることができる。ウィスコンシン大学ミルウォーキー校 Smith 教授の話では、エビデンス測定に要する時間やコストがその障壁となっている。この問題がクリアするために、エビデンス測定の自動化が検討されており、今後の研究によっ

てはエビデンスの活用が急速に活発になると予想される。

表 2004～2006年 Assistive Technology Outcomes and Benefits Journal
に掲載された論文の全タイトル

Vol.1 (2004)
Creating an Assistive Technology Outcomes Measurement System: Validating the Components (支援技術利用効果測定システムの作成：妥当性ある要素の確認)
The Augmentative and Alternative Communication Olympics: Raising and Showcasing Communication Competencies (拡大・代替コミュニケーションオリンピック：コミュニケーション能力の育成と発表)
Assistive Technology Outcomes in a Teacher Education Curriculum (教員教育カリキュラムにおける支援技術利用効果)
Using AAC Device Features to Enhance Teenager's Quality of Life (10代若者の生活の質向上に向けた拡大・代替コミュニケーション機器の機能の利用)
Technology Integration Solutions: Preservice Student Interns as Mentors (技術統合の解決法：メンターとしての就業前学生インターン)
Beyond Linear Syntax: An Image-Oriented Communication Aid (直線的な文法を超えて：画像によって動作するコミュニケーションエイド)
Vol.2 (2005)
The State of Assistive Technology Services Nationally and Implications for Future Development (米国支援技術サービスの現状と将来的発展への暗示)
Assistive Technology Outcomes: Implementation Strategies for Collecting Data in the Schools (支援技術利用効果：学校におけるデータ収集実施のための戦略)
The Central Role of Expectations in Communication and Literacy Success: A Parent Perspective (コミュニケーションと読み書きの成功に対する期待の中心的役割：親の視点)
Toward Positive Literacy Outcomes for Students with Significant Developmental Disabilities (重度発達障害のある児童の読み書き能力向上に向けて)
Assistive Technology as an Evolving Resource for a Successful Employment Experience (就職を成功へと導く進化するリソースとしての支援技術)
Outcomes of Preservice Teacher's Technology Use (就業前教員のテクノロジー利用に関する効果)
Vol.3 (2006)
The State of Assistive Technology: Themes From an Outcomes Summit (支援技術の現状：利用効果サミットからのテーマ)
Perspectives of Outcome Data from Assistive Technology Developers (利用効果データに対する支援技術開発者の見方)
A Case Study Model for Augmentative and Alternative Communication Outcomes (拡大・代替コミュニケーションに関する効果のためのケーススタディモデル)
AAC, Employment, and Independent Living: A Success Story (拡大・代替コミュニケーション, 就労, 自立生活：サクセスストーリー)
An Action Research Study of Computer-Assisted Instruction Within the First-Grade Classroom (1年生クラス内におけるコンピュータ支援指導に関するアクションリサーチ)
Comparison of Semantic versus Syntactic Message Formulation: A Pilot Study (発言の意味論的・統語論的作成方法の比較：パイロットスタディー)
Seeing Chemistry Through Sound: A Submersible Audible Light Sensor for Observing Chemical Reactions for Students Who Are Blind or Visually Impaired (化学を音で見る：全盲・弱視の生徒のための化学反応観察用浸す音出力光センサー)

IV. 研究成果の刊行に関する一覧表

巖淵守・中邑賢龍 2006 支援技術の効果に関するエビデンス（証拠）をベースとした評価 ～拡大・代替コミュニケーションにまつわる米国事情を中心に～ リハビリテーション・エンジニアリング, 21 巻

平林 ルミ・中邑 賢龍・近藤 武夫・福本 理恵 2007 支援機器利用効果の長期的変動に関する評価尺度の開発
ーデュシェンヌ型筋ジストロフィー者のパソコン利用を対象としてー 電子情報通信学会 福祉情報工学研究会（中京大学 2007 年 3 月 23 日）

巖淵守・中邑賢龍 2006 支援技術利用効果測定に関する欧米の動向 日本生活支援工学会誌, 6, 34-41.

V. 研究成果の刊行物・別刷

支援技術の効果に関するエビデンス（証拠）をベースとした評価
～拡大・代替コミュニケーションにまつわる米国事情を中心に～

巖淵 守⁽¹⁾、中邑賢龍⁽²⁾

(1) 広島大学大学院教育学研究科
〒739-8524 広島県東広島鏡山 1-1-1
TEL: 082-424-7097
E-mail: iwabuchi@hiroshima-u.ac.jp

(2) 東京大学先端科学技術研究センター
〒277-8568 千葉県柏市柏の葉 5-1-5
TEL: 04-7136-4480
E-mail: kenryu@bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp

キーワード:

エビデンス、EBP、評価、AT（支援技術）、AAC（拡大・代替コミュニケーション）

1. はじめに

支援技術（AT: Assistive Technology）は、障害のある人や高齢者の能動的生活を支援する上で大きな役割を果たし、近年、その利用も増えつつある。できなかったことが可能となることで、それら AT 製品の影響力はこれまで高く評価されてきたものの、それが主観的な評価にすぎない場合も少なくなかった。障害を持って誰かが AT を利用して生活できる社会を構築するには、AT 利用が何に対してどの程度の効果があるかについて、客観的・量的なエビデンス（証拠）を示すことが今後求められる。米国では、近年、AT に関するエビデンスをベースとした実践（EBP: Evidence-Based Practice）に大きな関心が寄せられ、その教育にも力が注がれている。本報告書では、AT の 1 つとしてコミュニケーション支援機器に関する話題に焦点を当て、機種を選定や導入、ならびに利用に対する訓練に EBP がどのように関わっているかについて、米国の現状を中心に紹介する。